

# 六 花



5

俳句雑誌りっか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

な に り お ら づ つ が ち み  
何 日 童 お 乱 図 九 学 地 道  
年 輪 宮 お 読 工 九 校 の 狭  
ぞ を へ 遅 読 室 折 の 果 く  
花 を 曳 咲 の 目 を 片 九 跡 な て くなり  
を 咲 かる の 周 け 付 九 地 な し と くる  
か せ 思 りを け ら 九 に 特 養 花 満 月  
せ 樹 花 踏 け ら 九 に 花 の 散 り に け り の 花  
な とな ぐ り ぬ 桜 山 山  
つ 天

つ つ の り ゐ る 喉 の 渴 き や 花 三 分  
て 掌 の 風 に こ ぼ れ て 散 り し 花  
い 一 所 懸 命 散 つ て 百 年 こ の 桜  
よ 宵 の 橋 醉 う て 白 川 桜 かな  
い 色 集 ま れ ば 紅 色 に 山 桜 かな  
よ 醉 ど れ の 筵 に 花 の 吹 雪 かな  
あ 悪 党 へ 善 人 へ 花 満 ち に け り  
ま 巻 き 戻 す す べ な き 日 々 の 桜 かな  
ぎ 義 理 立 て を 花 見 上 げ て は 忘 れ け り  
と 峠 ま で 桜 三 里 を 楽 し み ぬ

う 迂回して花参道へたどり着く  
げ 元さんの詠みし神戸の桜かな  
に 日本一地味なる花の降る句碑よ  
ち 散るきつかけは何でもよし山桜  
か かきむしる猫の首へと桜ちる  
づ 頭を下げてしだれ桜の籠目へと  
い いたづらに年重なりぬ花見酒  
た 大山寺裏の急流花万朶  
と 友だちの友だちメール花便り  
お 遅咲きの花追うて来し湖北かな

も 詣でけり命日前の桜もて  
う 後ろから前から花の吹雪かな  
こ こめかみに怒りの力花揚げ  
ろ 轆轤場の土に花びらへばりつく  
あ 天土は花の吹雪の中にある  
ま ままるまると豚太りけり花も喰ひ  
あ ああまりにも落花見事ぞ歩まれず  
し 静かなる刻はもの書く花の昼  
が 臥薪嘗胆六十九年の桜かな

※伊豆の踊子の書き出し

# 人波の上を風舞ふ宵戎

梶浦玲良子

人波の上を風舞ふ宵戎

爪を切る寒苦の夜の風の声

一条のひかりをまとひ実千両

外套の下の喪服が深呼吸

大寒の苦み走りし月の舟

ひとなみのうえをかぜまうよいえびす かじうられいりようし

新年の恵比須講は全国各地で行われる。中でも関西では兵庫県西宮市の西宮神社や神戸市兵庫区の柳原えびすは十日戎として大変にぎわう。その前日、九日の夜は出店が参道にずらり、参拝客は初詣をしのぐ混雑。寒の時期だが、着膨れた人込みの熱気で汗が滲むくらい混雑。掲句は、人波の上の空を寒風が舞って清々しいよと言う。神木の高みの揺れに風が見えるようだ。これこそ神風の舞。上空の風を示すことによつて逆に宵えびすの人出の熱気をよく伝えている。

# 風止んでふらふらと落つ春の雪 出口 誠

かぜやんでふらふらとおつはるのゆき でぐちまこと

一瞬に山けむらせて春の雪

山からの風に乗り来る春の雪

あつといふ間にも町へと春の雪

最期まで風に任せて春の雪

春の雪は大方がぼたん雪。風のある間は一定の方向性を持って降っていた。が、風が止んだとたん、方向を見失ったかにバランスを崩す。本来風が止むと上空から真っ直ぐに地上へおちてくるはず。いや落ちてはいる。しかしふらふらとしていると云ったのは文芸上の真実。風が吹いてもびくともせず健気に耐えている桜が、温かくなつた途端、力がぬけたように散り出すような心理に通う。そこをつかみ取って詠んだ無手勝流の勝利。誠さんが、じつと降る春の雪に注目していたからこそ、向こうから俳句がやってきた。

雪 卿 集

春落葉

佐津のぼる

ちぎれ藻のまぢつてをりし白魚網しろおあみ  
薄氷の溶けて濁りの残る濠  
消ゆるまで水面に浮かび薄氷  
開けてみたき石棺の蓋春落葉  
齒朶萌ゆる石垣壊えし砦跡

春の鳶

笹村政子

神木に埒の跡や冴返る  
雛壇の裏へ仮置く雛の箱  
ほろ酔の仕丁雛の反り身かな  
青空の展けてきたり春の鳶  
馬酔木咲く城の迷路の日だまりに



せつ じゆ しゆう  
雪 樹 集

春 天 田尻 勝子

寒すずめひと塊に降りにけり  
捨鉢にまはこべらの生ひにけり  
十年の未来を買はむ植木市  
春雨のあがりて葉裏の光かな  
鳶の群回りて春天曇りけり

立 春 市川伊團次

母<sup>かあ</sup>様の影に一夜官女の歩  
立春やとぎれとぎれのオルゴール  
如月や床に広がる古き染み  
ぼんやり夢中になつて春隣  
庭石に語りかけたる春立つ日

# 蛭雪譚 六甲



二十五年五月号選後に

寒の鯉鱸よりほかに動かさず

永田万年青

寒中の鯉は水底に沈んで殆ど動かない。じつとして寒いだらうにと思う。その動かない様子が、寒さに耐え忍んでいるように見えて哀れ。しかし、それは人間の立場から見た感情であつて、上から目線で見ないで欲しいと鯉は思っているかもしれない。人が思うほど鯉には寒くなく、むしろ心地よくうたた寝をむさぼつて居るのかも。「…そうだよ、今が一番心地良い時期、温かくなればお腹は減つてうごきまわらなければいけないし、夏が来たら人が手を叩いて餌を投げ込み、うるさいつたらありやしない…今のうちに寝とかないとね。少しは静かに寝かせてくれ」と叫びたくなるんじやよ。困つたもんだ」とね。…ああ、そうそう「鱸だけでも動かさないと、寒さで死んだのか」と大騒ぎになるからね、わしに何百万円もの値段を付ける愚か者ががいるんじやよ、死んだら大損だと騒ぐし…。と鯉が歎く夢を見た。紅い金魚や鯉の夢を見ると縁起が悪いというけど、これ以上どん底はないから平気だよ。生きてる証拠だからね。

# 六花集

お	お	石	大	も	幾	木	蠟	雨	冬	書	猫	林	冬	冬
松	水	段	石	の	た	枯	梅	音	ご	庫	車	道	早	萌
明	取	の	に	の	び	や	の	の	も	と	扱	の	家	や
は	石	敷	敷	芽	の	世	香	白	り	化	ひ	轍	の	更
ぜ	段	途	か	や	の	渡	は	く	祖	す	慣	落	ど	地
る	中	中	れ	小	名	り	か	な	父	娘	れ	葉	こ	に
火	で	で	た	石	残	べ	そ	り	も	の	て	と	か	立
の	聞	聞	る	起	の	た	け	く	用	部	共	共	が	て
粉	け	け	如	こ	雪	の	く	も	ひ	屋	に	に	啼	る
や	稚	り	し	し	や	吹	も	春	し	に	春	凍	き	ポ
雨	児	山	い	て	二	き	も	立	火	紙	を	に	は	ン
の	滑	笑	ぬ	笑	月	だ	春	ち	桶	に	待	凍	は	プ
中	る	ふ	ふ	出	堂	ま	ち	ぬ	か	紙	待	凍	は	井
	る	ふ	り	す		り	ぬ	冬	な	籬	つ	て	む	戸

平居 滯子

菊谷 潔

赤松有馬守破天龍正義